生活通信

NO.９２　平成２９年１１月号　岡崎市現職研修生活科広報部発行

授業における「作用」について

生活科部長　加藤有悟

最近、授業における「作用」について考えている。ここでいう「作用」とは、「他に影響や力を及ぼすこと。相互間に生じる各種の影響。またはそうした働き」としておきたい。

おもしろい授業には、新しい発見・気付きや技能の向上、感性の高まりがある。そうした成長や向上、高まりがうまれるところには「作用」がある。授業における「作用」を細かく見ると、【子供と教材・学習対象との作用】、【子供と子供との作用】、【子供と教師との作用】がある。

〇おもしろい授業（単元）

子供の認識の成長・技能の向上・感性の高まり
↑
作用のある学び【子供⇔教材・学習対象、子供⇔子供、子供⇔教師】
↑
始めの子供の認識・技能・感性

こうした学びでは、子供が自らの成長や向上、高まりを実感できる。したがって、学びの喜びも大きい。

一方、おもしろくない授業は、「作用」がないか少なく、話し合いという名の発表が羅列的に並んだり、教師の説明が平板に続いたりしていく。図にすると次のようになる。

▲おもしろくない授業（単元）

始めの子供の認識・技能・感性⇒作用のない学び⇒認識の成長・技能の向上・感性の高まりが少ない

この学びでは、子供は自らの成長や向上、高まりを実感できない。したがって、学びの喜びに乏しい。

では、生活科の授業における「作用」とは、具体的にどのようなものだろうか。

その好例が、８月１日の授業力・教師力アップセミナー基礎編で実践報告された、山中小学校での鵜野祥江教諭（現矢作南小）の２年１学期「山中の町でメガはっ見」の実践である。

「学区の人たちは自分たちを大切にしてくれている」という気付きとなる
↑
④発見したことを１年生に伝えるために話し合う
↑
③もっと知りたいと思うことを調べる
↑
②友だちのおすすめを確かめ発見したことを紹介しあう
↑
①おすすめの場所や人を調べて紹介しあう
↑
子供は学区の人々に対して特に意識していない

鵜野教諭は単元計画の中に①～④の活動を設定し、意図的指導（繰り返し対象と関わる・気付きを表現する・比較検討する・伝えたい相手を意識して整理する）を進めていく。

単元終盤の④の授業記録を見ると、児童Ａ「(Ｘさんは）学校に通う子供たちに、元気に登校してほしいという願いで、いつも立ってくれています。」、児童Ｂ「(Ｙさんは）学校のみんなが交通事故にあわないようにと思っています。」、児童Ｃ「(Ｖさんは）みんなを守るという気持ちでやっている。」などの発言が続く。そして、整理の段階で鵜野教諭は、板書を見て「似ている言葉は何かな」と問う。すると、子供たちは「『子供』か『みんな』、どっちかが入っている」と気付いていく。そして、終末で「(学区の人たちは）みんなを大切にしてくれる」と、学びがまとめられる。

単元開始時点では、子供たちは学区の人々に対して特段の意識をもっていなかった。それが、【子供と教材・対象との作用】、【子供と子供との作用】、【子供と教師との作用】の積み重ねによって、最終的に単元の目標「自分たちの生活が人々に支えられていることに気付くことができる」に到達している。

授業において「作用」を大切にしていけば、学びの質を高めていくことができるようである。